

地域活力の創造・安心安全の構築・ 参画型社会の実践によるまちづくり

はじめに

五所川原市は、青森県の西北部、津軽平野のほぼ中央に位置し、東は津軽山地を挟んで県都青森市、西は岩木川を挟んでつがる市に、南は鶴田町にそれぞれ接しています。北は、中泊町中里地域に接し、同地域を介在して本市市浦地域が中泊町小泊地域に接しています。

平成17年3月に五所川原市、金木町、市浦村の1市1町1村による新設合併により、新たな五所川原市としてその歩みを始めました。合併前の3市町村は、岩木川流域に位置し、郡制施行後の明治11年には、五所川原市に北津軽郡役所が置かれたことから、住民生活のつながりも深かった地域です。新たな五所川原市は、「五所川原立佐武多」や太宰治の生家である、太宰治記

念館「斜陽館」、十三湖の「大和シジミ」など多くの地域資源に恵まれています。

五所川原地域ブランド推進協議会の設立

近年、全国的にも地域資源の付加価値を高めることを目的に地域ブランド化が進んでいます。本市でも「五所川原地域ブランド推進協議会」を設立し、本年8月、ブランドイメージキャラクター「ごしょりん」が誕生したところです。

「ごしょりん」は、本市特産の「赤いりんご」と立佐武多を融合したキャラクターで、頭には十三湖産のシジミを模したアクセサリと、夏祭りの掛け声「ヤツテマレ!」(「やってしまえ」の意)の鉢巻きを締め、胴体には、日本さくら名所百選にも数えられた県立若野公園

の桜をあしらっています。協議会では、加工品や農林水産部門のブランド化を目指し、積極的に地域特産品の販路拡大を図り、地域活力の創造に努めています。

自治体病院機能再編成などによる住民生活の安心安全の構築

本市を含め近隣の2市4町で構成する「つがる西北五広域連合」では、医師不足や厳しい病院経営を背景に自治体病院機能再編成を進めています。圏域5つの自治体病院の医療機能を再編し、主に救急医療や高度・専門医療を担う「つがる総合病院」と、初期医療や急性期治療後の医療を担うサテライト病院・診療所を整備するものです。現在、平成25年度の開院を目指し、建設中の「つがる総合病院」を



ブランドイメージキャラクター「ごしょりん」

地域医療の核として、持続可能な医療サービスの提供体制を目指しています。また、五所川原地区消防事務組合では、本年度内の完成に向け、五所川原消防署庁舎の老朽化に伴う庁舎の移転新築を進めています。さらには、本年7月に三重県亀山市と、8月には茨城県鹿嶋市との間でそれぞれ「災害時相互応援に関する協定」を締結したところです。

この協定は、東日本大震災を教訓に、万が一の大規模災害が発生し、広範囲にわたって被災したとき、遠隔地にある自治体と支援し合うことで、応急対策や復旧活動をより円滑に行える防災体制の強化を図ることを目的としています。こ

地域コミュニティの育成と協働の仕組みづくりの推進

本市では、市民団体が地域課題の解決に向け、自主的に取り組む活動を支援する「市民提案型事業」を実施しています。申請された事業は、公開プレゼンテーションなどにより市民提案型事業審査会の委員が審査します。委員には、学識経験者のほか、実際に地域づくり活動を実施しているNPO法人などの代表者が就任しています。

平成22年度からスタートした事業ですが、これまで福祉・教育・



市民協議会での議論の様子

観光振興などさまざまな分野で35件の事業が採択され、それぞれが地域課題の解決に向け、事業に取り組んでいます。

また、本年度は、新たに、本市と公益社団法人五所川原青年会議所の共催で「五所川原市民協議会」を開催しています。協議会では、住民基本台帳から無作為で抽出された市民が5つのグループに分かれ「五所川原の好きなところ」・「ちょっと嫌いなところ」「市民ができる五所川原の魅力アップ大作戦」「魅力アップ大作戦の具体的な方法」について討議し、発表していただいたところであり、こうした新たな手法による官民一体となった参画型社会の実践によるまちづくりを積極的に推進しています。

結びに

少子高齢化や人口減少が指摘されており、本市を取り巻く状況も例外ではありません。また、国、地方共に厳しい財政状況が続くことが予想されます。

こうした中であって、先人たちが綿々と築き上げてきた素晴らしい地域資源を後世にしっかりと引き継ぎ、ふるさと五所川原市が、さ

らなる発展を成し遂げるためには、市民・企業・行政がしっかりとしたパートナーシップ関係を築き上げることが重要です。

今後とも、地域活力の創造・安心安全の構築・参画型社会の実践というまちづくりの目標の下、「活力ある・明るく住み



五所川原新立佐武多「復興祈願・鹿嶋大明神と地震鯨」(平成24年製作)

よい豊かなまち」の実現に向け各種施策に取り組んでまいります。

プロフィール

- ◆ 面積 404.56km²
- ◆ 人口 5万9958人
- ◆ 世帯数 2万5011世帯

- 〔将来都市像〕 活力ある・明るく住みよい豊かなまち
- 〔まちの特徴〕 海・山・湖・津軽平野といった豊かな自然、歴史と文化
- 〔市町村合併〕 平成17年3月28日、五所川原市、金木町、市浦村で新設合併
- 〔特産品〕 十三湖の「大和シジミ」(サイ)



五所川原市長 平山誠敏



- メンなど)、赤いりんご(ワイン、ジュース、ジャムなど)、甘露梅
- 〔観光〕 立佐武多の館、太宰治記念館「斜陽館」、津軽三味線会館、しゅうらんど「海遊館」
- 〔イベント〕 金木桜まつり、太宰治生誕祭、五所川原立佐武多、地吹雪体験ツアー

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

過去と未来が交差するまち 足利

歴史と伝統、自然が調和

足利市は、栃木県の南西部、群馬県との県境に位置しており、東京からは北へ80kmの距離にあります。市の中央を東西に渡良瀬川が貫流し、北部には日光連山へと続く美しい山並み、南部には豊かな



史跡足利学校「学校門」

関東平野が広がり、風光明媚な自然にあふれています。

日本最古の総合大学といわれる史跡足利学校や、足利氏ゆかりの鑊阿寺をはじめとする数多くの文化遺産のほか、300近い神社仏閣が存在し、今も古き時代の面影を残しています。その寺社の多さから、珍しい伝統行事も多く、赤ちゃんの額にご朱印を押して無病息災を願う「初山まつり」(通称ペタンコ祭り)や杉丸太を山頂まで担ぎ上げる「梵天祭り」、大晦日の晩に「バカやろう」などと大声で叫ぶ「悪口祭り」などさまざまなものが伝承されています。

また、鎌倉時代の随筆「徒然草」の中でも足利の織物について触れられているように、足利は古くから織物のまちとして知られていました。最近では、かつて足利が生

産量日本一となった大衆向けの着物「足利銘仙」が、まちおこしに役買っています。この銘仙姿でまち歩きをする女性も増え、歴史のまちにふさわしい彩りを添えています。

市民の誇り「足利学校」

足利学校の創建には諸説ありますが、室町時代に関東管領上杉憲実が再興し、応仁の乱以後には学徒3000人といわれるほどに隆盛しました。天文18年(1549)にはイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルにより「日本国中最も大にして、最も有名な坂東の大学」と世界に紹介されました。このころの足利学校出身者の中には、戦国武将に仕え、軍師や外交官、書記官などとして活躍した者もいたといわれています。

足利学校は市民の誇りであり、本市観光のシンボルです。この足利学校を核とした誘客活動として、数値目標を掲げた「足利学校参観者倍増計画」を本年からスタートさせました。

主な倍増策として、旅行企画会社などへのトップセールスをはじめ、論語を切り口とした魅力発信、修学旅行や日帰り遠足の誘致、「おもてなしの心」を醸成する市民総コンシエルジュ(案内人)運動などに取り組んでいます。

また、この計画を着実に進めていくため、民間の観光業に携わっている方々に呼び掛け、「足利観光誘客戦略会議」を立ち上げました。専門的な視点から観光誘客に向けたさまざまな議論がなされ、本年10月に提言を取りまとめたいたところでした。

論語のまち足利

足利学校での教育は、孔子の教えに基づく儒学が中心でした。と

りわけ「論語」はその基本であり、足利学校でも詳しく講義されています。この記録が残されています。

「まちづくりは人づくり」といわれますが、この論語には人生を生き抜く上での知恵が数多く散りばめられており、人づくりの原点があると考えています。

そこで、平成22年度から、市内全小中学校で朝の会や帰りの会などの時間を利用した論語の素読を始めました。導入から2年が経過し、子どもたちが家で論語をそらんじて親を驚かせるという話も伝わってきています。

また、本年3月に発足した「足利学校・全国論語研究会」を中心に、



友好都市・中国済寧市の児童による論語の素読体験

論語検定や全国論語素読の集いを開催するなど「論語のまち足利」を全国に発信しています。

本年の8月には、友好都市であり、孔子の故郷である中国済寧市の小学生50人が足利学校を訪れ、論語の素読を体験しました。

足利市民総発電所構想

また、市の新たな取り組みとして、足利市民総発電所構想を推進しています。

東日本大震災による原発事故によって電力供給が厳しさを増す中で、市を挙げて、効果的・効率的な電力の「創電」「節電」「蓄電」を図るものです。

「創電」の取り組みの一つとして、市内の太陽光発電業者に有償で公共施設の屋根を貸し出します。使用料収入だけでなく、公共施設における災害時の電力確保、再生可能エネルギーの利用促進、地域経済の活性化が期待できます。

「節電」としては、電力の使用が一目で分かる電力監視装置の設置です。公共施設の電力使用量の見える化によりピークカットによる節電を図るほか、モニターとなった家庭にも同様の機器を設置します。

「蓄電」としては、電気自動車の普及や、避難所となる施設を中心に、蓄電池の整備を進めています。

これらの取り組みによって生み出された財源を、家庭用の電力監視装置の導入費補助に充てています。

規模は小さいながらもエネルギー問題に対して本市が全国に先駆けて試みる大きな一歩になればと考えています。

プロフィール

- ◆ 面積 177.82km²
- ◆ 人口 15万2089人
- ◆ 世帯数 6万1897世帯

- 〔将来都市像〕歴史と文化を育み、ひとが輝く都市(まち) あしかが
- 〔まちの特徴〕渡良瀬川の清流と緑の山並みが調和した歴史と文化のまち
- 〔特産品〕そば、和菓子、ワイン、ポテト入り焼きそば



足利市長
大豆生田実



- 〔観光〕史跡足利学校、鑊阿寺、あしかがフラワーパーク、栗田美術館、足利織姫神社、ココ・ファーム・ワイナリー、渡良瀬橋
- 〔イベント〕足利花火大会、足利尊氏公マラソン大会、節分鐘年越し、釋奠(せきてん)、足利秋まつり

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

元気でうるおいのある オンリーワンのまちづくり

はじめに

川西市は人口約16万人、市域面積53・44㎢、兵庫県の東南部に位置し、地形は東西に狭く、南北に細長いタツノオトシゴのような形をしています。

また、大阪市・神戸市などへのアクセスがよく、交通の利便性が高い住宅都市です。

本市の北部には、「にほんの里100選」に選ばれた黒川地区や「ダム湖百選」に選ばれた知明湖があり、豊かな自然と暮らしが共生しています。

また、中部には大規模な開発団地が広がるとともに、清和源氏発祥の地として有名な「多田神社」があり、毎年4月には「川西市源氏まつり」が開催され、源氏ゆかりの武者などによる懐古行列が「多田神

社」周辺を練り歩きます。

また、南部には、百貨店などの商業施設が集積し、市の中心市街地を形成するとともに、歴史あるイチジクの産地もあるなど表情豊かなまちです。

川西市の発展の経緯と課題

本市は今から約40年前、高度経済成長期に人口が急増し、財政規模も飛躍的に拡大し、発展しました。

その中で一定規模以上の団地の開発を行う事業者に対して、公共施設の整備などを求める「川西市住宅地造成事業に関する指導要綱」を全国に先駆けて施行しました。

一方で、こうしたまちの発展から約半世紀を経て、インフラをはじめとする公共施設などが時を同じくして一斉に更新を迎えること

となるとともに、現在は起債の償還、現役世代のリタイアに伴う市税収入の減少、かつてのニュータウンがオールダウン化するなどの課題を抱えています。

このような中で、本年度は「第4次川西市総合計画」の最終の総括と「第5次川西市総合計画」の策定という節目の年となります。

これからの本市の10年間の長期にわたるビジョンを描くに当たっては、市制施行以来、初めて経験する人口減少と急速に進行する高齢化を念頭に置いた対応が求められています。

笑顔と元気がみなぎるまちづくり

本市の中心に位置する阪



桜の下を彩る懐古行列(源氏まつり)

また、かつて本市の成長を牽引したニュータウンの再生を目指し、同様の課題を持つ大分市など7市で構成する「ふるさと団地の元氣創造推進協議会」に加盟し、互いの情報や意見交換を行い、地方自治体だけでは解決できない規制緩和や制度改正を必要とする課題については、国に対して提案や要望を行っています。

さらに、本市独自に地域団体の代表者、学識経験者、交通事業者、金融事業者や民間デベロッパーなどで構成する「ふるさと団地再生協

議会」を設置し、モデル団地において、空き家・空き地の状況調査や住民へのアンケート調査を実施するとともに、その結果を踏まえ、具体的な方策の協議・検討を行っています。

また、中心市街地や地域産業の活性化およびふるさと団地の再生などを目的とした「地域振興連携協力に関する協定」を株式会社池田泉州銀行との間で締結し、これに基づき、産業振興や若年層の空き地、空き家への流入を促進する仕組みなどを検討しています。

市民とともに築くまちづくり

人口減少や高齢社会の進展などにより、行政の経営資源が厳しい制約を受ける一方、社会保障費の増大への対応など、課題が山積しています。そのため、本市では公共を担うさまざまな主体がそれぞれの役割を果たして課題を解決していく、参画と協働のまちづくりをこれまで以上に進めていくこととしています。

計画策定に向けたワークショップ



結びに

現在、経済協力開発機構(OECD)をはじめ、わが国においては、地域課題の解決に当たるため、「地域分権制度」の創設の検討を進めています。さらに、市民の新しい発想と手法により、社会的課題や身近な地域課題を解決する(仮称)市民協働提案事業の制度創設や(仮称)地域担当職員制度の検討など、市民とともに築くまちづくりを進めていくこととしています。

国内総生産(GDP)などの経済指標だけでは測れない「人の幸福感」を探るための新たな指標が研究・検討されています。

そこで、本市においても、GDPに配慮しつつも、市民の幸福につながる成長の在り方を探り、「市民の幸せ」に焦点を当てた政策づくりを進めていくこととしています。

プロフィール

- ◆ 面積 53・44㎢
- ◆ 人口 16万873人
- ◆ 世帯数 6万7364世帯

〔将来都市像〕わがまちと 実感できる 夢現都市

〔まちの特徴〕緑豊かな里山を有し、「清和源氏発祥の地」として、自然と悠久の歴史、文化に包まれたまち



川西市長 大塩民生



- 〔特産品〕イチジク、桃、一庫炭(菊炭)、栗
- 〔観光〕一庫ダム、多田神社、満願寺、頼光寺
- 〔イベント〕川西市源氏まつり、猪名川花火大会、川西一庫ダム周遊マラソン大会、川西まつり

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

清流に歴史と文化を映すまち

いちじよこ(一條公)さん

高知県西南部の幡多地域は、言葉もいわゆる土佐弁の激しさとは違うように、独自の歴史や文化をはぐくんできました。

幡多の中心地「中村」は、応仁の乱勃発の翌年(1468年)、京都の戦乱を避けた前関白「一條教房公」を迎えました。教房公は京都を模したまちづくりを行い、当時形成された碁盤の目状の町並みや大文字の送り火の風習、東山、鴨川、



最後の清流 四万十川

逢坂の地名などが今も残っており、「土佐の小京都」と呼ばれています。最近では最後の清流四万十川でも有名になりました。

今年江戸幕末、土佐一條家の遺徳をしのんで一條神社が創建され、その大祭「一條大祭」(通称いちじよこさん)が始まってから150年になることから、この11月、本市で3回目の全国京都会議(サミット)を開きます。この会議は京都にゆかりのあるまちが交流を図ろうと、昭和60年、中村をモデルに結成されたものです(現在加盟48)。

命を守る 南海トラフ巨大地震対策

本市は昭和21年の南海地震では建物倒壊と火災により、全国最多の犠牲者(死者291人)を出します。

約100年に1度必ず起こるといわれる次の地震では、四万十川を遡上してくる津波にも備えなければなりません。「津波から命を守る対策」「建物倒壊から命を守る対策」「地震災害に強い組織(地区・行政)をつくる対策」として、津波避難計画の策定をはじめ、避難道や避難場所の整備、避難マップの作成のほか、住宅耐震化助成事業、公共施設の耐震化、行政情報や防災情報の伝達手段の多様ななどに予算を重点配分し、次の地震では1人の犠牲者も出さない決意で取り組んでいます。

四万十川アピール

東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故では、大量かつ高濃度の放射性物質が放出、拡散

里も栄えて街も栄える

中村は、かつては「おまち」と呼ばれたほど、伝統と風格、そしてにぎわいと活気のあるまちでした。四万十川流域の主要産業である農林水産業がそれを支え、街と里とが共存共栄の関係にありました。

周辺の中山間対策をしっかりと行うことで街にもにぎわいが戻ってきます。この間、農商工連携事業を立ち上げ、特産品を開発し、地産外販を進めているほか、流域の豊富な資源である「四万十ヒノキ」をブランド化するとともに、地元の木材を使い、地元の大工さんの手で造られた住宅への150万円の補助制度も創設。山間地にはケーブルテレビを敷設し、デマンドバス、タクシーも運行しています。

平成22年からは、地域づくり支援員制度を導入。高齢化が進む集落に対して市職員を支援員(兼務)として配置。本年からは、全集落を対象に、①健康づくり、②介護予防、高齢者・障害者生きがい交流、③支え合い地域づくり、に取り組む「健康福祉委員会」の結成を進めています。

市民の命と健康を守る砦である市民病院は、長く医師の減少が続いていましたが、UターンやIターンの医師を迎えることなどにより、増加に転じ、新たに脳ドックや医師訪問検診を開始しています。

「遅咲きのヒマワリ」

本市には、清流四万十川や小京



土佐一條公家行列「藤まつり」

都中村を何度も訪ねて来てくれるファンが大変多くいます。100kmを走る「四万十川ウルトラマラソン」は申込者約5000人という日本一の大会になりました。市の情報発信交流事業として、インターネットなどを通して2年前から「四万十市ふるさと応援団」の募集を始めたところ、団員は既に1100人を超えました。こうしたファンには移住者も多く、平成23年度、市の人口は約10年ぶりに社会増に転じました。本年度からは、国の制度を活用し「地域おこし協力隊」を都会地から募集。大勢の申し込みがあり、20〜30歳代の男女3名を採用し、

プロフィール

- ◆ 面積 632.42km²
- ◆ 人口 3万5984人
- ◆ 世帯数 1万6456世帯

〔将来都市像〕第一次産業をしっかりと守り、観光資源などと融合させ、自然と共生をした交流ネットワークが広がるまち

〔まちの特徴〕とうとうと流れる四万十川。大文字にひっそりと公家文化を燃やす小京都中村

〔市町村合併(平成11年3月末以降)〕平成17年4月10日、中村市と西土佐村が対等合併



四万十市長 田中 全



〔特産品〕鮎、鰻、青のり、川えび、ごり、ツガニ、山間米、ぶしゅかん、ドレッシング、四万十栗流川煮、ゆず甘酢、40010かりんとう

〔観光〕四万十川カヌー、沈下橋、サイフィン、一條神社、トンボ王国(トンボ自然公園)、安並水車の里公園、黒尊溪谷、天体観測

〔イベント〕四万十川ウルトラマラソン、四万十川水泳マラソン大会、一條大祭、藤まつり(土佐一條公家行列)、四万十川花絵巻、大文字の送り火

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。